高原町文化財調査報告書　第11集

# 町内遺跡Ⅲ

2003．3

宮崎県西諸県郡

高原町教育委員会

高原町文化財調査報告書　第11集

# 町内遺跡Ⅲ

2003．3

宮崎県西諸県郡
高原町教育委員会

# 序　　文

高原町教育委員会では、平成13年度から14年度にかけて、様々な開発事業等に伴う試掘調査及び本掘調査を実施しました。今回は、その成果を掲載しています。

今回の調査で得た様々な成果が、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助になることを期待いたします。

最後になりましたが、この発掘調査にあたり、御理解をいただきました土地所有者の方々をはじめ、御指導・御援助をいただきました関係諸機関並びに地元の方々に、心から御礼を申し上げます。

今後とも、本町の文化財行政に対する御指導・御協力をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成１５年３月

高原町教育委員会
教育長　外　山　方　圀

# 例　　言

１．本書は、高原町教育委員会が平成13年度から14年度にかけて実施した、開発事業等に伴う試掘及び本掘調査の報告書である。このうち、試掘調査については、文化庁及び宮崎県教育委員会の補助を受けて実施している。

２．調査関係者は、次の通りである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 調査主体 | 高原町教育委員会 | | |
| | 教育長 | | 正入木　久　男(～平成14年1月21日) |
| | | | 外　山　方　圀(平成14年1月22日～) |
| | 社会教育課 | 課長 | 久保田　芳　人(～平成13年度) |
| | | | 境　和　彦(平成14年度) |
| | | 係長 | 温　谷　文　雄(平成13年度) |
| | | | 益　本　一　博(平成14年度～　) |
| 調査員 | 社会教育課 | 主事 | 大　學　康　宏 |
| 調査指導 | 宮崎県教育委員会　文化課 | | |
| 調査協力 | 高原町役場教育総務課　地権者のみなさん　作業員のみなさん | | |

３．本書の執筆・編集は大學があたった。

４．本書で使用した方位は、全て磁北である。

# 本　文　目　次

序　　文
例　　言
本文目次
挿図目次
表 目 次
図版目次

第Ⅰ章　　高原町の歴史 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　第１節　高原町の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　第２節　高原町の埋蔵文化財 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　第３節　高原町の歴史 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
9
第Ⅱ章　　川除遺跡の発掘調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
　第１節　遺跡の概要及び調査にいたる経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
　第２節　発掘調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
　　１　発掘調査事業の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
　　２　調査区の層序 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
　第３節　調査区内出土の遺構・遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
　　１　出土遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
　　２　出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
　第４節　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

第Ⅲ章　　藤兵衛山地区の試掘調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
　第１節　位置及び調査にいたる経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
　第２節　試掘調査の成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
　第３節　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

第Ⅳ章　　佐土遺跡の表採資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
　第１節　遺跡の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
　第２節　表採資料の検討 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
　第３節　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

# 挿 図 目 次

第１図　高原町及び町内遺跡位置図 ････････････････････ 2
第２図　報告書掲載遺跡位置図 ････････････････････ 11
第３図　川除遺跡位置及び周辺地形図 ････････････････････ 14
第４図　川除遺跡調査区位置図 ････････････････････ 14
第５図　川除遺跡調査区土層断面図 ････････････････････ 15
第６図　川除遺跡出土遺構図 ････････････････････ 16
第７図　川除遺跡出土遺物分布図 ････････････････････ 16
第８図　川除遺跡出土遺物実測図 ････････････････････ 18
第９図　藤兵衛山遺跡周辺地形図 ････････････････････ 30
第10図　藤兵衛山地区調査箇所位置図 ････････････････････ 30
第11図　佐土遺跡周辺地形図及び表採地点位置図 ････････････････ 33
第12図　佐土遺跡詳表採縄文土器実測図（１） ････････････････ 34
第13図　佐土遺跡詳表採縄文土器実測図（２） ････････････････ 35

# 表 目 次

表１　川除遺跡出土土器観察表 ････････････････････ 19
表２　川除遺跡出土石器計測表 ････････････････････ 19
表３　川除遺跡出土土師器観察表 ････････････････････ 19
表４　佐土遺跡表採縄文土器観察表　１ ････････････････ 35
表５　佐土遺跡表採縄文土器観察表　２ ････････････････ 36

# 図 版 目 次

図版１　川除遺跡遠景、畝状遺構完掘 ････････････････････ 21
図版２　川除遺跡表土掘削、畝状遺構検出 ････････････････ 22
図版３　川除遺跡畝状遺構検出 ････････････････････ 23
図版４　川除遺跡畝状遺構検出・掘削 ････････････････････ 24
図版５　川除遺跡畝状遺構埋土・掘削 ････････････････････ 25
図版６　川除遺跡畝状遺構完掘、下層掘削、出土遺物 ･･････････ 26
図版７　川除遺跡出土遺物、完掘、層序 ････････････････ 27
図版８　川除遺跡出土遺物 ････････････････････ 28
図版９　藤兵衛山遺跡調査区遠景、崩落部分掘削・内部状況 ･･････ 31
図版10　佐土遺跡表採縄文土器（１） ････････････････････ 37
図版11　佐土遺跡表採縄文土器（２） ････････････････････ 38

# 第Ⅰ章　　高原町の歴史(第１図)

## 第１節　高原町の概要

高原町は、宮崎県の南西部に位置する町である。町域は東西約18km・南北10kmと東西に長く、中心部でややくびれており、面積は85.42k㎡である。高千穂峰(標高1,574m)を中心とする霧島連山を鹿児島県との県境に持ち、南東部は鹿児島県曽於郡霧島町、南部及びその周囲は宮崎県都城市・北諸県郡山田町・高崎町、町北部を流れる岩瀬川を境に西諸県郡野尻町・小林市とそれぞれ接している。市街地は町のほぼ中心部、岩瀬川の支流である辻の堂川の南方の標高約200m前後の台地に位置している。町内の殆どは広大な台地とその周囲を巡る谷で占められ、そのうち山林・原野は、町域の約50%を占めている。

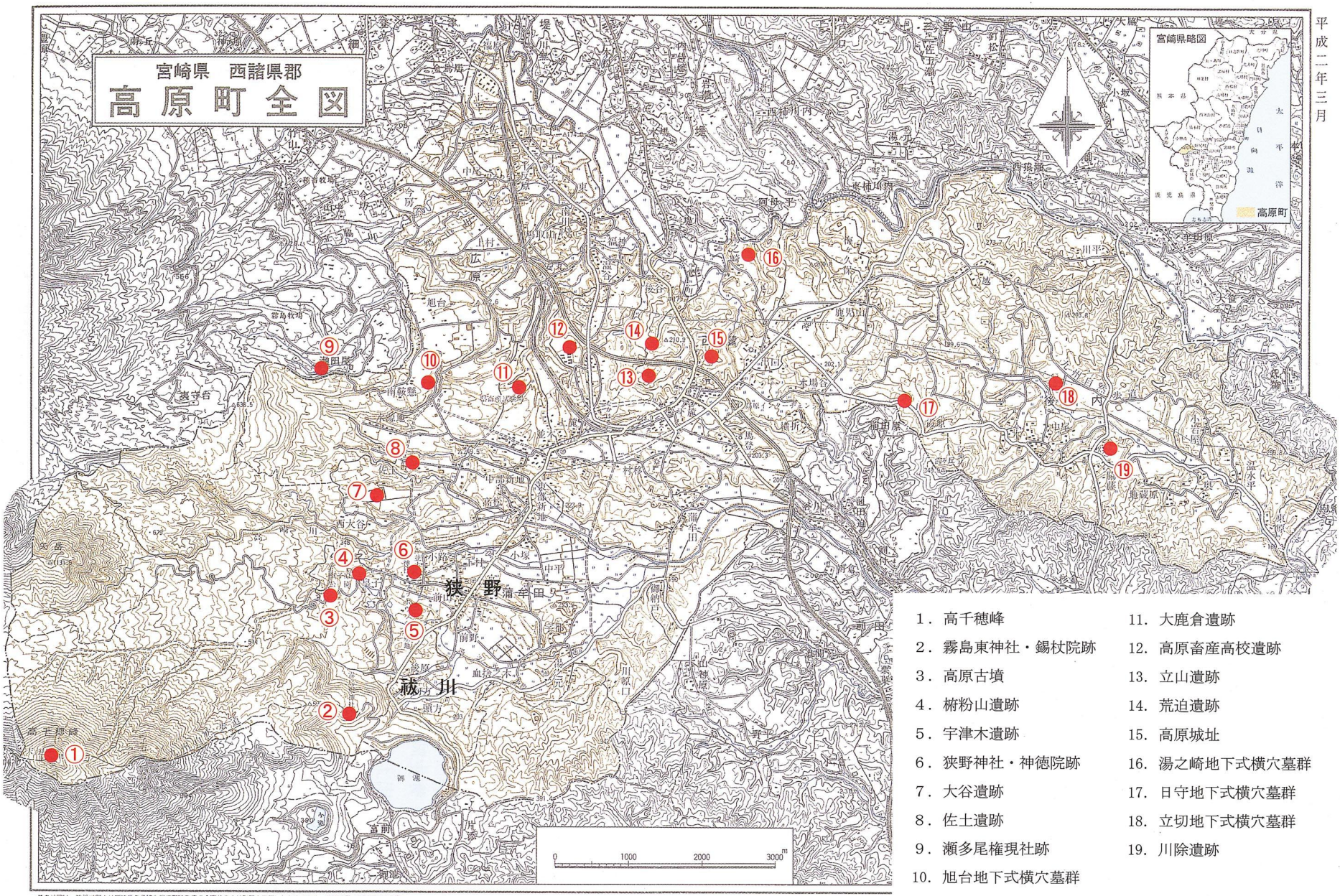
## 第２節　高原町の埋蔵文化財

まず、遺跡の成果を以て当地の状況を推測すると、まず、高原町に関してのみ言えば、旧石器時代の遺跡は確認されていない。現在のところ確認できた最も古い遺跡は縄文時代前期である。高原町の東側の後川内地区に位置する川除遺跡では、古代の畠遺構を構成する土層から轟Ｂ式の破片が数点確認された(1)。又、大谷遺跡では、表採資料の中に曽畑式が数点確認された。現在のところ、この２遺跡のみである。縄文時代早期及びそれ以前の遺跡については、約6,400年前に屋久島北側の鬼界カルデラより噴火したアカホヤ火山灰と、ほぼ同時期に古高千穂峰(高千穂峰の南東側・殆ど埋没)より噴火したウシノスネ上下層(2)によって、縄文時代中期以降の遺跡と分けられており、発掘調査で早期層序まで辿り着く事ができないのが現状である。又、旧石器時代近辺については、さらに約25,000年前に姶良カルデラより噴火したＡＴ火山灰(シラス)をはじめ、霧島山系の火山灰が台地を厚く覆っているため、調査が不可能な状態にある。

縄文時代中期になると、徐々に遺跡が増加する。昭和43年に発掘調査され、高原町で初めて縄文・弥生時代の遺物が層位的に確認された高原畜産高校遺跡(3)や椨粉山遺跡などで阿高式土器が出土した。

縄文時代中期末から後期に入ると、遺跡の数(というよりも遺物量)が爆発的に増大する。高原町で発見された遺跡の殆どが縄文時代後期の土器を含んでいるといっても過言ではない。主な遺跡としては、前述した高原畜産高校遺跡、正式な発掘調査を踏まえてはいないが莫大な表採資料を抱える大谷遺跡(4)や椨粉山遺跡などである。しかし、その殆どが包含層からの出土であり、遺構は検出されていない。又、型式についても、ごく一部では言及されている(5)ものの、未だ不明な点が多い。

これより先、縄文時代晩期頃から遺跡数が激減する。特に、弥生時代の遺跡は殆ど見られない。理由の一つに挙げられるのは、調査数の少なさによる。特に高原町では開発が早い時期に行われたため、主要な遺跡の殆どが調査の機会なく破壊されてしまっている。弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡が調査されたのは、立山遺跡・荒迫遺跡のみである。この




1．高千穂峰
2．霧島東神社・錫杖院跡
3．高原古墳
4．椨粉山遺跡
5．宇津木遺跡
6．狭野神社・神徳院跡
7．大谷遺跡
8．佐土遺跡
9．瀬多尾権現社跡
10．旭台地下式横穴墓群
11．大鹿倉遺跡
12．高原畜産高校遺跡
13．立山遺跡
14．荒迫遺跡
15．高原城址
16．湯之崎地下式横穴墓群
17．日守地下式横穴墓群
18．立切地下式横穴墓群
19．川除遺跡

この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。承認番号 平2九複第79号

第１図　高原町及び町内遺跡位置図

うち、荒迫遺跡では、弥生時代後期から古墳時代にかけての住居址や掘立柱建物・土坑・溝などの遺構が検出された(6)。しかし、遺構の検出状況から密集した集落とは言い難い。又、荒迫遺跡の、高速道路を挟んだ南側に位置する立山遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡が30基近く検出され、さらに軽石製の炉や埋甕などの住居跡付随遺構が検出された(7)。

高原町における古墳時代の遺跡は、集落遺跡よりも地下式横穴墓の方が著名である。高原町では、これまでに４群107基が検出されている。その内訳は、湯之崎地下式横穴墓群１基・旭台地下式横穴墓群13基・日守地下式横穴墓群31基・立切地下式横穴墓群72基である。

湯之崎地下式横穴墓は、昭和47年11月に整地作業中に発見・調査された。１基のみの検出だったが、４体程の埋葬人骨が見られた他、刀子・鉄鏃・鉋など11点の副葬品が見られた(8)。

旭台地下式横穴墓群は、昭和50年12月に土木作業中の崩落により発見・調査されたが、殆どが天井部落下による損傷を受けるなど残存状況はあまり良くないものの、９号墓では鉾・鉄釧が出土した他、全体として約100点近い鉄製副葬品が出土した(9)。後の研究により、埋葬位置から直線配置埋葬のＡ群、円形配置のＢ～Ｄ群に分類され、他群に較べてのＡ群の優位性が指摘されている(10)。又、調査以外にも地下式横穴墓が発見されたという話もあり、実際はより広範囲に渡った群と推測される。

日守地下式横穴墓群は、高原町及び隣の北諸県郡高崎町大字前田字仮屋尾に広がる地下式横穴墓群である。高崎町側では、昭和44年の九州縦貫自動車道に伴う緊急分布調査や、昭和44・45年の採土作業に伴って９基発見されており、群が認識されていたが、高原町側においては、昭和54・55年に渡る採土作業により初めて発見された。発見された８基の中には、束柱のレリーフの他、シラスを敷いた屍床や塗朱痕・天井部の彩色線文などが見られた(11)。続く昭和56年に隣接地で確認調査した結果、10基の地下式横穴墓・土器溜りなどが検出された(12)。又、平成９年２月には道路を挟んだ南側で２基検出され、蛇行剣や異形鉄鏃等が出土した(13)。平成10・11年には天理大学考古学研究室による電気・レーダー探査が行われ、空洞反応等を利用した墳丘復元や玄室内の未発掘デジタルカメラ撮影などが試みられた(14)。

立切地下式横穴墓群は、昭和63年12月に圃場整備中に発見され、２箇年に渡り発掘調査が行われた結果、72基というこれまでにない量の地下式横穴墓が検出された。群内には赤色顔料を使用して垂木や棟木を表現したものが多く見られた他、レリーフ状の束柱なども見られた。又、埋葬人骨77体、刀剣や刀子の他、線刻の入った鉄鏃・鉋・鍬先・鉄斧・毛抜状鉄器等の鉄製副葬品277点、琥珀製小玉や管玉・臼玉・鉄釧・イモガイ製腕輪等の装身具123点など、副葬品も豊富に出土した。なお、地下式横穴墓に伴わない土器溜りが２箇所検出され、墓前祭の可能性が指摘されている(15)。

これ以後、遺跡の発見例は急激に減少し、地下式横穴墓の下限である６世紀前半から９世紀に至るまでは歴史的に全くの空白となる。丁度その時期に当たる遺跡も発見されていないため、想像の域を出ないが、当地域は古代朝廷において神格化された霧嶋岑神の住まいである霧島山の麓に位置している事から、この時期はすでに人の生活を受け入れないような山林地帯だったのではないだろうか。

しかし、９世紀に入ると、現在の町域の数箇所で同時多発的に開墾が行われている。住居跡などはあまり検出されないのに対し、畠と思われる畝状遺構が多数検出されている。この

時期の遺跡のうち発掘調査が行われたのは、荒迫遺跡・立山遺跡・大鹿倉遺跡・川除遺跡・大谷遺跡・椨粉山遺跡だが、この６遺跡のうち畝状遺構が検出されたのは、荒迫遺跡・川除遺跡・大谷遺跡(16)・椨粉山遺跡の４遺跡である(17)。このうち、最も広範囲で検出されたのが荒迫遺跡である。しかし、長期間に渡って耕作されたのではなく、９世紀後半から10世紀にかけてのごく数年間に使用されたと推測されている。又、栽培作物については未だ判明しておらず、川除遺跡や椨粉山遺跡で若干のイネの痕跡が見られた程度で、大方は根菜類の可能性が高い。

この畠が使用されなくなった後は、ススキなどが生息する野原のような状態になったと思われる。その後はほぼ山として認識されていたようで、鎌倉時代から中世にかけては、荒迫遺跡・大鹿倉遺跡(18)・椨粉山遺跡(19)・宇津木遺跡(20)などで狩猟用と見られる陥し穴が数多く検出されている。ただ、かなり散発的あるいは不規則に作られているため、狩猟方法や対象動物などについては不明である。

## 第３節　高原町の歴史

高原は、後ろに高千穂峰がそびえている事もあって、以前から天孫降臨の地として認識されていたようである。江戸時代末期に編纂された『三国名勝図會』(21)には、

> 土俗傳へ云、當邑を高原と號するは高天原の略称なりと、凡日向国内此辺は、神代の皇都に係り、今に都島都島は今の都城、高城などといへる地名殘るも此が為にて、此地、都島と接し、平砥曠邈、土壌膏腴、土俗の伝亦従ふべし、（後略）

とある。そしてその伝承に沿うかのように山頂には「天の逆鉾」が立てられている。立てられたのは江戸時代辺りと推定されるが、詳細は不明である。高千穂峰は、主に北部の小林方面から南東部の都城盆地の辺りで山岳信仰の対象として崇拝されてきた。前述の地には、華立（霧島山の遙拝所）が数多く存在する。又、長門本『平家物語』(22)の、藤原成経が治承元年(1177)に鬼界島へ流罪になるくだりで、霧島山に触れた記述があるが、そこでは霧島山を、

> 彼庄内にあさくら野と云所に、ひとつの峯高くそびえて、煙りたえせぬ所あり、日本最初の峯、霧島のだけと號す、金峰山、しやかのだけ、富士の高根よりも、最初の峯なるが故に、名付て最初の峯といふ、六所権現の霊地也、

と表現している。長門本『平家物語』が完成したと思われる中世辺りには、霧島山は霊山として認識されていたようである。

しかし、霧島山の信仰等の実体については、史料も少なく、未だ不明の点が多い。まず、古代の文献を見てみると、『続日本後紀』「承和四年八月壬辰朔」条(23)に、承和４年(837)に日向国の都農神・妻神・江田神と共に官社に列せられ、従五位上の位が与えられた、とある。『日本三代実録』「天安二年十月己酉」条(24)には、前記に続き、天安２年(858)に従四位下に昇格した、とある。この時は「霧島岑神」と称されているのみで、具体的な場所を示しているわけではなく、山そのものを示しているものと思われる。

続いて、延長５年(927)に成立した『延喜式』「十神祇」(25)には、諸縣郡一座として霧嶋神社の

名が挙がっている。周辺の神社には、当時の社殿は高千穂峰と中岳の鞍部の迫門丘(瀬多尾・せたお)にあったと云われている。

このように、位を授けられた９世紀中頃には山が神格化され、10世紀初頭には規模は不明ながらも社殿が存在した事を窺わせる。それと相俟って山岳修行の場としても認識されるようになったと思われる。承平５年(935)頃に成立したとされる『倭名類聚抄』(26)には、「諸縣(牟良加多)郡」のうちとして、「財部・縣田・苽生(宇利布乃)・山鹿・穆佐・八代・大田・春野」の８郷が挙げられている。この内、財部は現在の高鍋町、苽生は現在の宮崎市瓜生野、穆佐は高岡町穆佐と思われる。この８郷のうち、当地方を指しているのは、現在のところ春野郷という説が有力である(27)。

文献に残る最古の霧島山での修行者は、比叡山の僧侶性空である。性空は延喜10年(910)に京都で生まれ、36歳で比叡山延暦寺の慈恵大師良源に師事して出家、九州を中心に修行し、康保３年(966)に播磨国書写山に円教寺を創建した。『朝野群載』等では、36歳で出家した後、４年間を霧島山で修行し、その後肥前国背振山へ修行の場を移したとある。霧島山周辺の寺社も、性空を開祖或いは中興の祖としている所が殆どである。しかし、どの書物も「霧嶋」と記しているのみで、具体的な場所は不明である。なお、高千穂峰の東南部にある御池と呼ばれる火口湖があるが、『三国名勝図會』によると、当時、御池には、松・躯瀬(むくらせ)・皇子(おうじ)・劔崎(つるぎさき)・刈茅(かるかや)・柳・護摩壇(ごまんだん)、７つの港があり、そのうち護摩壇港の上には、性空上人が護摩行を行ったという伝承がある。

このように、歴史のその殆どの時期が深い山林地帯であったため、近年に至るまで連綿と続く歴史は無いに等しい。実際に史料に登場するのは16世紀以降で、霧島山の噴火による壊滅も相俟って、あらゆる文化形成面については、近世以降に成立したと推測される。

中世では、高原は殆ど山岳修験の道場となる程山林化していたため、史料に登場する事は殆どないが、現在の町域は三俣院(現在の都城市近辺)あるいは真幸院(現在のえびの市近辺)に含まれていたと推定される。木脇家文書『三俣院記』(28)には、

夫日州諸縣郡三俣院者、霧島山之面、者境飫肥、者境高原、

とある。又、高原町内の冨田家文書に『剱之巻』(天正20年奥書・嘉永４年書写)(29)という、狭野に伝承されている神舞に関係のある文書と推定されるが、その奥書には、

天正二十年壬辰二月十一日
正祝子　岩元兵部大夫
権祝子　日高権左衛門
日州三俣院霧嶋
万治二年己亥二月破岸書之
右古記虫付ニテ不続所而已有之
嘉永四歳辛亥正月　日高宮内代ニ書写ス

と記されている。

一方、木脇家文書「真幸院記」(30)には、

夫日州諸縣郡真幸院者、為霧島山之北面、東者境小林、北者境求摩、西境栗野流六里余

也、

とある。

これらの史料から単純に推定していくと、高原は三俣院の境界付近に位置していたと思われるが、実際は、他の古文書では小林の内に高原が含まれていたりするなど、小林や高原の境界自体が不明確なため、一概に判断する事はできない。永濱家文書『高原所系図壱冊』(31)では、天文20年(1551)に北原氏領内となり、元亀元年(1570)に伊東氏の領内になったとある。北原氏は応永年間(1394～1428)辺りから真幸院を領有したが、永禄年間(1558～1570)に起こった当主北原兼守没後の家督継承問題に乗じ、伊東氏が領有する事となった(30)。

これから推測すると、真幸院と三俣院の境界に位置する高原は、常に双方の勢力争いの矢面に立っていた事になる。

又、高原は、日向国と大隅国の国府付近(現鹿児島県国分市)を結ぶ要衝である事から、日向中部の伊東氏・真幸院の北原氏・薩摩国の島津氏の３氏による争いが続き、現在の市街地に位置する高原城は、３氏の勢力争いの舞台となった。16世紀半ばに入って伊東氏の領地となったが、天正４年(1576)８月に、島津義久・義弘ら島津勢が攻め落とすと共に周辺諸城も落城し、島津氏の領地となった(32)。豊臣秀吉の九州平定以後、島津久保、次いで島津義弘の領地となるなど変動するが、以後薩摩藩領として定着する。その後領内は地頭制が敷かれ、地頭については鹿児島から派遣された。歴代の地頭については『高原所系図壱冊』に詳しい。各地頭については以下の通りである。

| | |
|---|---|
| ・鎌田刑部少輔 | 天正３年(1575)～ |
| ・上原長門守尚近 | 天正５年(1577)～ |
| ・吉田若狭 | 天正９年(1579)～ |
| ・山田理庵 | 天正11年(1581)～ |
| ・新納旅庵 | 天正14年(1586)～ |
| ・山田理庵 | 天正18年(1590)～ |
| ・入木院又六重時 | 慶長２年(1597)～慶長５年(1600、関ヶ原で戦死) |
| ・島津大膳亮忠俊 | 慶長７年(1602)～ |
| ・村田九郎左衛門 | 寛永９年(1632)～ |
| ・鎌田源左衛門政有 | 寛永15年(1638)～ |
| ・猿渡大炊之介 | 正保３年(1646)～ |
| ・相良主税(主計？) | 承応３年(1654)～ |
| ・相良吉右衛門 | 明暦３年(1657)～ |
| ・喜入休右衛門 | 寛文６年(1666)～ |
| ・山田民部少輔(弥九郎)有祐 | 寛文９年(1669)～ |
| ・若松彦兵衛 | 貞享元年(1684、以後２年無地頭) |
| ・種子島次郎右衛門 | 貞享３年(1686)～ |
| ・喜入休右衛門 | 貞享５年(1688、元禄元)～元禄３年(1690)　以後無地頭 |
| ・椛山権右衛門尉 | 元禄９年(1696)～元禄15年(1702)　死去に伴い以後無地頭 |
| ・清水弥兵衛尉 | 宝永２年(1705)～ |
| ・左近允與太夫 | 正徳３年(1713)～享保２年頃？ |
| ・種子島次郎右衛門 | 不　明(記録無し) |

・伊集院仁左衛門　　不　明(記録無し)
・市来勘左衛門　　不　明(記録無し)
・畠山喜藤太(数馬)　　不　明(記録無し)
・伊集院伊膳　　不　明(記録無し)
・石黒戸後左衛門　　不　明(記録無し)
・椛山助之進(物集女)　　安永８年(1779)？～
・日高次右衛門　　文化元年(1804)
※地頭病死に伴い、以後、大御番頭北郷作右衛門預かり
・平嶋平八　　文化８年(1811、拝命後すぐに拒絶)
・吉岡久馬　　文化９年(1812)～文政７年(1824、死去)
・島津典禮(相馬)　　文政８年(1825)～
・福崎助八　　安政元年(1854)～
・島津矢柄　　安政５年(1858)～
・名越屋左膳太(名越左源太)　　元治元年(1864)～
※小林・高原・野尻・須木・飯野・加久藤の６ヶ郷統合地頭職
・中原周助　　慶応２年(1866)～慶応３年(1867、死去)
・谷川十郎兵衛　　慶応３年(1867、拝命直後死去)
・近藤七郎左衛門　　慶応３年(1867)～
※小林・高原・野尻・須木・高崎の５ヶ郷統合地頭職

※なお、前述した高原郷の地頭履歴については、『高原所系図壱冊』内でも、目次部分の地頭履歴と本文で異なる部分が多く見られたため、順番等は基本的には本文に即した。又、氏名等の不足分については他の古文書も利用した。

高原の領域は、地頭制施行当初は麓(高原)村・蒲牟田村・入木(後川内)村(以上、現高原町)、前田村・大牟田村・笛水村・江平村(以上、現高崎町)だが、延宝８年(1680)の領域変更に伴い、前田・大牟田・江平が高崎郷として独立する代わりに紙屋郷水流村(現都城市)・小林郷広原村(現高原町大字広原)が編入、新しく５村で構成され、幕末に到る。『高原所系図壱冊』には、度々「無地頭」という記述が見られ、地頭不在を窺わせる。さらに、19世紀前半頃には高原郷そのものに地頭が派遣されるのではなく、周辺の数郷を地頭１人に一括支配させる体制が行われた。当初は小林を中心に周辺の５ヶ郷(高原・加久藤・飯野・須木・野尻)を併せた６ヶ郷請持体制となったが、その後、小林に高原・須木・野尻・高崎を併せた５ヶ郷請持に再編成された。この前半の６ヶ郷・後半の５ヶ郷請持体制が後の西諸県郡の基礎に繋がるものと思われる。

明治時代に入り、明治16年(1883)に宮崎県が設置されると、同年６月には北諸県郡、翌17年(1884)１月からは西諸県郡に属した。その後、明治22年(1889)の町村制施行に伴い、麓・蒲牟田・広原・後川内の４村が合併して高原村が成立、昭和9年(1934)には町制施行に伴って町に昇格し、現在に至る。

近世の高原は、前述の通り霧島山の麓に位置しているため、宗教的に非常に発展した所であった。平安時代の僧侶性空により修行場としての基礎が作られたという伝承を持ち、中世

には島津氏・伊東氏による宗教施設の奪い合いや、中世における島津氏の政策決定手法の「御鬮(みくじ)」が行われるなど、宗教的な側面で重要視される方が多かった。特に島津氏による九州制覇の過程では、その支配方法等について、霧島山の神意を問う記述が多く見られる(33)。中世から近世にかけては、「霧島六所権現」と呼ばれる、６つの寺社が大きな勢力を持つようになった。このうち、高原には、霧島東御在所両所権現社(現霧島東神社)・狭野大権現社(現狭野神社)の他、霧島山中央六所権現社(現霧島岑神社)の別当寺である瀬多尾権現社跡の計３社寺がある。

このように宗教的に重要視されている場所のため、神楽(神舞(かんまい))等の民俗芸能も多く伝わる。高原には、祓川(はらいかわ)地区と狭野(さの)地区に神舞が伝承されている。祓川は毎年12月の第２、狭野は12月の第１土曜日から日曜日の早朝にかけて、夜を徹してそれぞれの地区で行われる。「大宝の注連」と呼ばれる、願成就の際に神を勧請する道具の神籬を、御講屋(あるいは神庭)と呼ばれる祭場の裏に立て、天蓋を作り、山の神信仰にまつわるものや、天の岩戸神話に基づく舞などが行われる。両神楽とも、南九州の神楽分布圏における「霧島神舞」系統の中核に位置しており、真剣を用いたアクロバティックな舞が多いのが特徴である。周辺部の神舞が衰退あるいは消滅した現在、非常に貴重な存在となっている(34)。なお、高原の場合は、神楽を「神事(かんごっ)」と呼称しており、これは、同様の芸能をすべからく神楽と呼称している現状について一考を要する事を証明する名称である(35)。最近では県内神楽の包括的な研究も進み、霧島修験及び神舞と椎葉や阿蘇等の修験や神楽との共通性が指摘されている(36)。又、神舞で使用している面等は、定型化する以前の能面あるいは猿楽面のイメージを色濃く残している事が判明している(37)。

その他の民俗芸能で、著名なものに苗代田祭が挙げられる。地元では方言を用いた「ベブガハホ」と呼ばれている事が多い。「ベブ」は牛、「ハホ」は「主婦・妊婦」を表す西諸県地方の方言である。毎年２月18日に狭野神社の本殿前で行われる予祝祈願の田遊び神事の一種である(38)。古文書により17世紀後半には祭が行われている事が判明している一方、江戸時代に使用された木牛も残存している(39)。

その他、南九州に広く分布する棒踊りや奴踊り・臼太鼓踊り(最近になり消滅(38))などの芸能の他、鹿児島県の知覧町や甑島で有名な十五夜の綱引き神事(40)などの行事も残存している。

【参考文献】

(1)大學康宏　1999「川除遺跡」『高原町文化財調査報告書』第５集　高原町教委

(3)石川恒太郎　1972「高原町縄文期包含層調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第16集　宮崎県教委

日高正晴　1989「高原畜産高校遺跡」『宮崎県史　資料編　考古１』宮崎県

(4)大學康宏　1999「大谷遺跡表採縄文土器資料」『高原町文化財調査報告書』第４集　高原町教委

(5)横手浩二郎　1994「宮崎県西諸県郡高原町大谷遺跡表採の縄文土器」『南九州縄文通信』№８　南九州縄文研究会

(6)和田理啓・久木田浩子　1998「荒迫遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第11集

(7)宮崎県埋蔵文化財センターの永友良典氏のご教示による。

(8)石川恒太郎　1973「高原町湯ノ崎地下式古墳調査報告書」『宮崎県文化財調査報告書』第17集　宮崎県教委

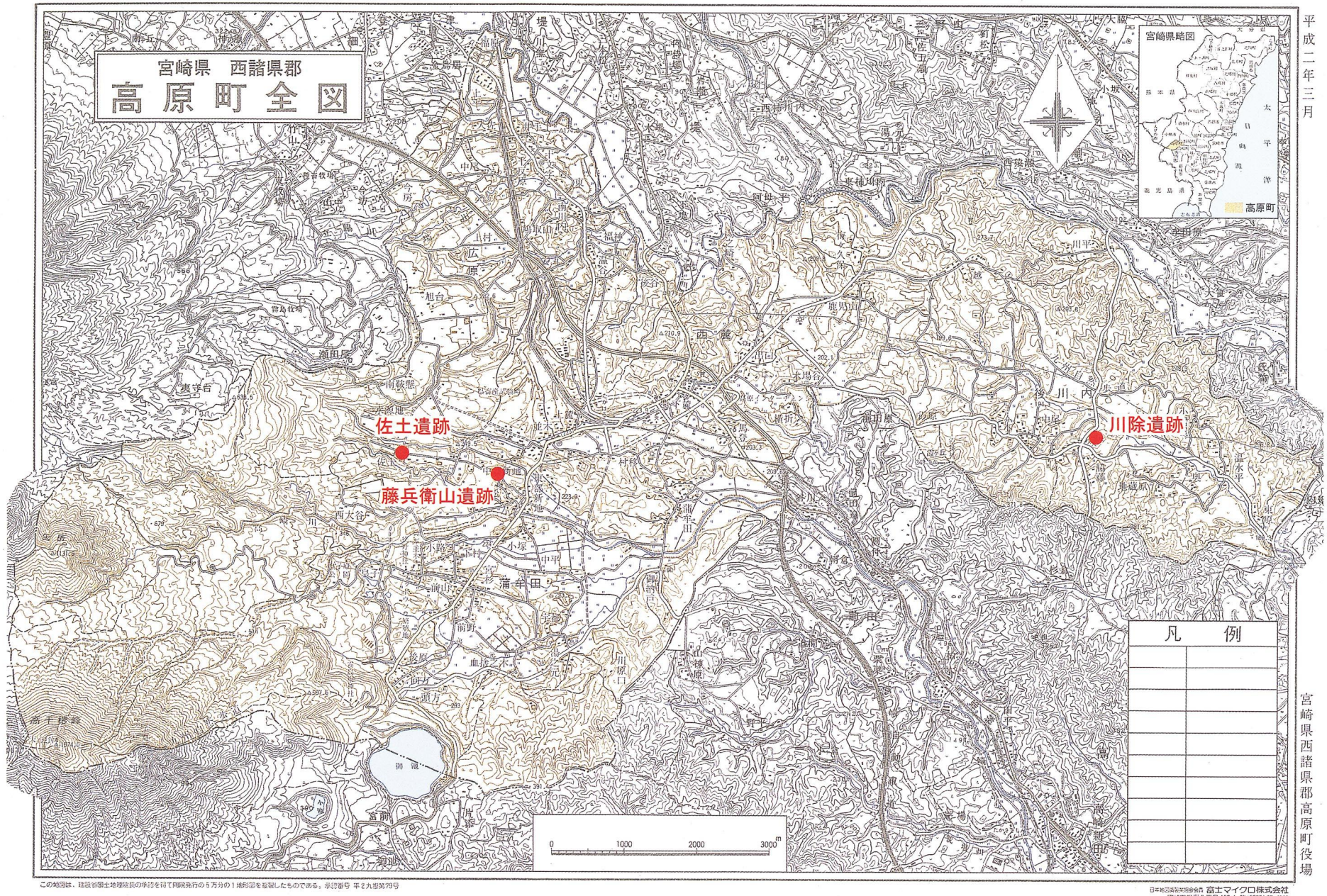
(9)石川恒太郎・日高正晴　他　1976「旭台地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第19集　宮崎県教委

(10)中野和浩　1998「地下式横穴墓の群構造」『宮崎考古』第16号　宮崎考古学会

(11)岩永哲夫　他　1980「日守地下式横穴(古墳)54-1～4号発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第22集　宮崎県教委
岩永哲夫　他　1981「日守地下式横穴(古墳)55-1～4号発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第23集　宮崎県教委
(12)岩永哲夫　1981「日守地下式古墳群確認調査」『宮崎県文化財調査報告書』第24集　宮崎県教委
(13)大學康宏　1999「日守地下式横穴墓群」『高原町文化財調査報告書』第４集　高原町教委
(14)置田雅昭　2001「宮崎県高原町日守地下(立坑)式横穴墓群」『墳丘のない墓の探査研究』平成9-12(1997-2000)年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))実績報告書(補訂)　天理大学遺跡探査チーム
(15)面高哲郎・長津宗重他　1991「立切地下式横穴墓群」『高原町文化財調査報告書』第１集　高原町教委
(16)宮崎県教育委員会文化課編　1997「大谷遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第40集　宮崎県教委
(17)立山遺跡については、畝状遺構が検出される土層での精査を実施していないため、詳細は不明。
(18)調査を担当された宮崎県埋蔵文化財センターの南正覚雅士氏のご教示による。
(19)大學康宏　2003「椨粉山遺跡－古代遺構・遺物編－」『高原町文化財調査報告書』第10集　高原町教委
(20)宇津木遺跡については、平成13年度から14年度にかけて発掘調査を実施した。成果については後日報告書を作成する予定である。
(21)原口虎雄監修　1982『三國名勝圖會』第４巻　図書出版青潮社
(22)『宮崎県史　史料編　古代』309頁に所収
(23)『宮崎県史　史料編　古代』136頁に所収
(24)『宮崎県史　史料編　古代』153頁に所収
(25)『宮崎県史　史料編　古代』187頁に所収
(26)『宮崎県史　史料編　古代』206頁に所収
(27)野口逸三郎監修　1997『宮崎県の地名』日本歴史地名体系46　平凡社
(28)『宮崎県史　史料編　中世２』93頁に所収
(29)昭和女子大学教授の渡辺伸夫氏のご教示による。
(30)『宮崎県史　史料編　中世２』69頁に所収
(31)『宮崎県史　史料編　近世５』936頁に所収
(32)大學康宏　2001「高原城跡の縄張り調査」『高原町文化財調査報告書』第８集　高原町教委
(33)永松敦　1993『狩猟民俗と修験道』167頁～　白水社
(34)山口保明　2000『宮崎の神楽　祈りの原質・その伝承と継承』　鉱脈社
(35)昭和女子大学教授の渡辺伸夫氏・椎葉民俗芸能博物館副館長の永松敦氏のご教示による。
(36)永松敦編　2002『平成14年度特別企画展　椎葉の修験道文化』　椎葉民俗芸能博物館
(37)元昭和女子大学教授の後藤淑氏のご教示による。
(38)鹿児島短期大学教授の松原武実氏のご教示による。
(39)『三国名勝図會』の狭野権現社の条項には、例祭として「二月初酉日・九月廿九日・十一月中酉日」を挙げている。一方、町内の岩元家文書「神社由緒之事」(年不詳)には、

一　木牛　右二月初酉御祭之節入用ニ而御座候処享保年中嶽大燃之節焼失付社人増田早左衛門致彫刻候由

という記述が見られる。この２つから推測すると、「二月初酉日」の祭が今に言う苗代田祭と考える事ができる。又、『享保年中嶽大燃之節焼失』という記述は、他の古文書から推測しても享保元年(1716)から２年(1717)にかけての新燃岳の大噴火を指している事がわかる。そう考えると、享保元年の新燃岳噴火前には、木牛及びそれを使用した祭が確実に存在した事になる。又、現存する木牛には、『文政七年』の他『岩元』『日高』など狭野権現社の社人の墨書が残る。
(40)『宮崎県史　別編　民俗』281～292頁に所収




この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。承認番号 平2九地第79号

日本地図調査研究会員 富士マイクロ株式会社
宮崎市橘通西2丁目182-1 TEL(0985)27-4069

第２図　報告書掲載遺跡位置図

# 第Ⅱ章　　川除遺跡の発掘調査

## 第１節　遺跡の概要及び調査にいたる経緯（第３・４図）

川除遺跡は、宮崎県西諸県郡高原町大字後川内字川除の、後川内小・中学校が立地している台地状に位置する遺跡である。同小学校において、既存のプールの老朽化により、敷地内（旧後川内小学校体育館跡地）に新設のプール建設の計画が上がった。それに伴い、高原町役場教育総務課より平成13年６月12日付にて同地区の遺跡照会があった。当該区周辺は、平成９年度に後川内小学校屋内体育館新設に伴って発掘調査が行われ、調査の結果、遺構では古代の畠遺構と中世の道路跡が、遺物では縄文時代前期土器（轟Ｂ式）・無茎石鏃（姫島産黒曜石他）・土師器（成川式甕・高坏・布痕土器）・鉄鏃・貨幣（洪武通宝）等がそれぞれ出土した。

工事予定区は前回調査区の約100ｍ程東側に位置しており、遺跡の存在が有力視されたため、試掘調査を平成13年７月31日から８月７日にかけて実施した。工事予定区（約400㎡）に対して試掘坑を４箇所設置して掘削したところ、第１～２試掘坑より畝状遺構を検出した。又、試掘坑全てから遺物が出土し、第２試掘坑からは石鏃が出土した。

これを受けて教育総務課と社会教育課で協議をしたところ、遺跡を保存した状態での工事は困難との結論となり、やむを得ず記録保存を取る方針となり、教育総務課の費用負担による発掘調査を実施する事となった。

調査組織は以下の通りである。

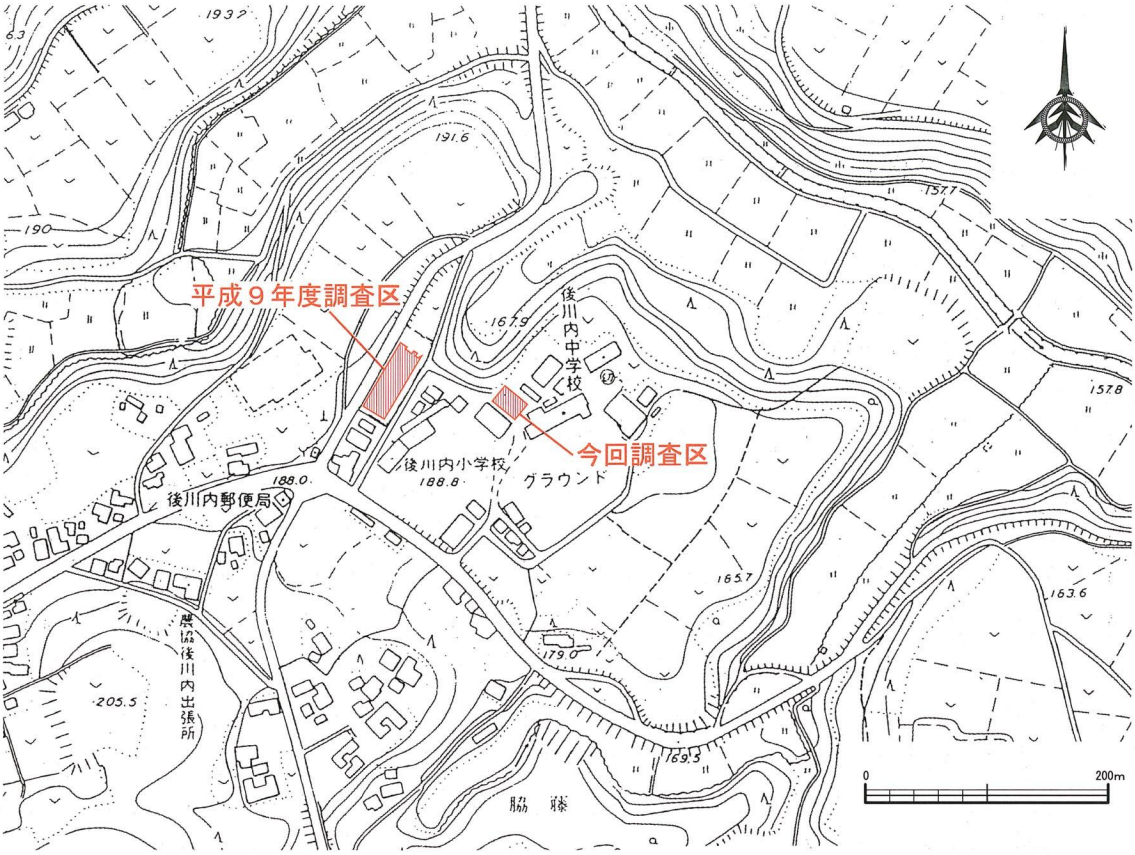
| | | | |
|---|---|---|---|
| 調査主体 | 高原町教育委員会 | | |
| | 教　育　長 | | 正入木　久　男 |
| 調査担当 | 社会教育課 | 課　長 | 久保田　芳　人 |
| | | 係　長 | 温　谷　文　雄 |
| 調査員 | 社会教育課 | 主　事 | 大　學　康　宏 |
| 庶務担当 | 教育総務課 | 課　長 | 尾　曲　良　治 |
| | | 係　長 | 内　村　宗　則 |
| | | 主　査 | 湯　田　啓　子 |
| | | 主　事 | 外　村　秀　樹 |

| | |
|---|---|
| 調査区内地形・遺構測量委託 | 有限会社　ジパングサーベイ |
| 調査区内空中撮影委託 | 有限会社　スカイサーベイ九州 |

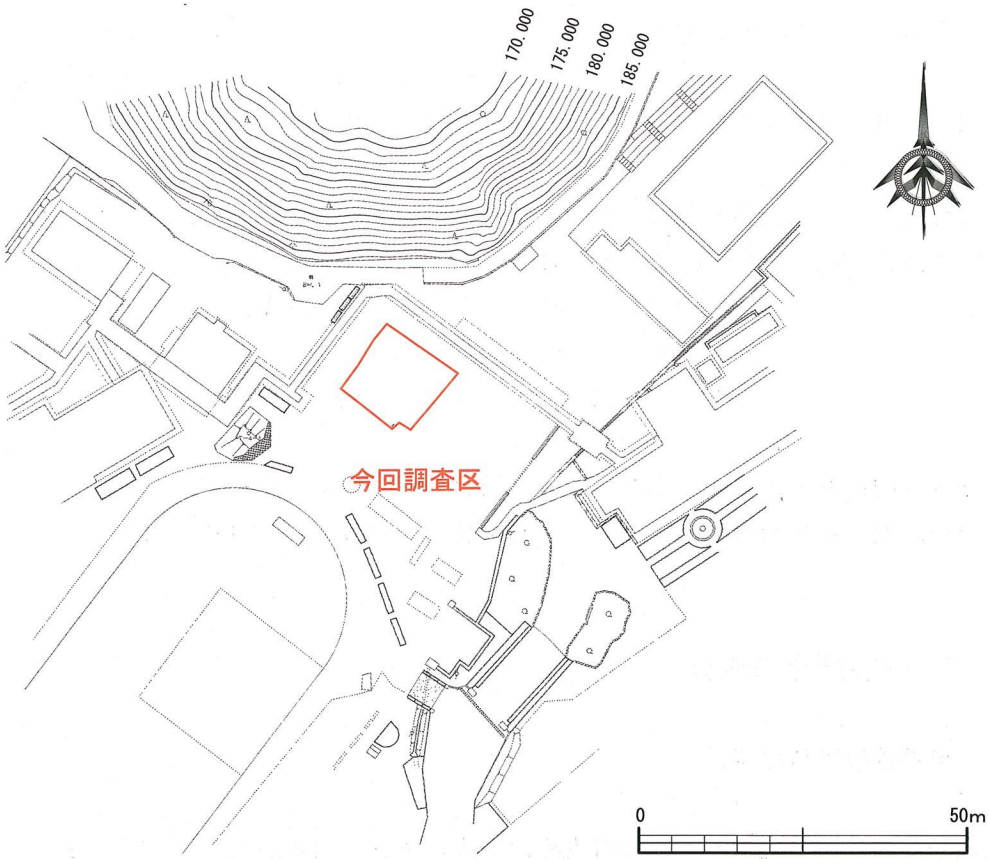
## 第２節　発掘調査の概要

### １　発掘調査事業の経過

発掘調査については、補正予算可決後の平成13年９月24日から同年11月７日まで実施した。大まかな日程の流れは以下の通りである。




第３図　川除遺跡位置及び周辺地形図

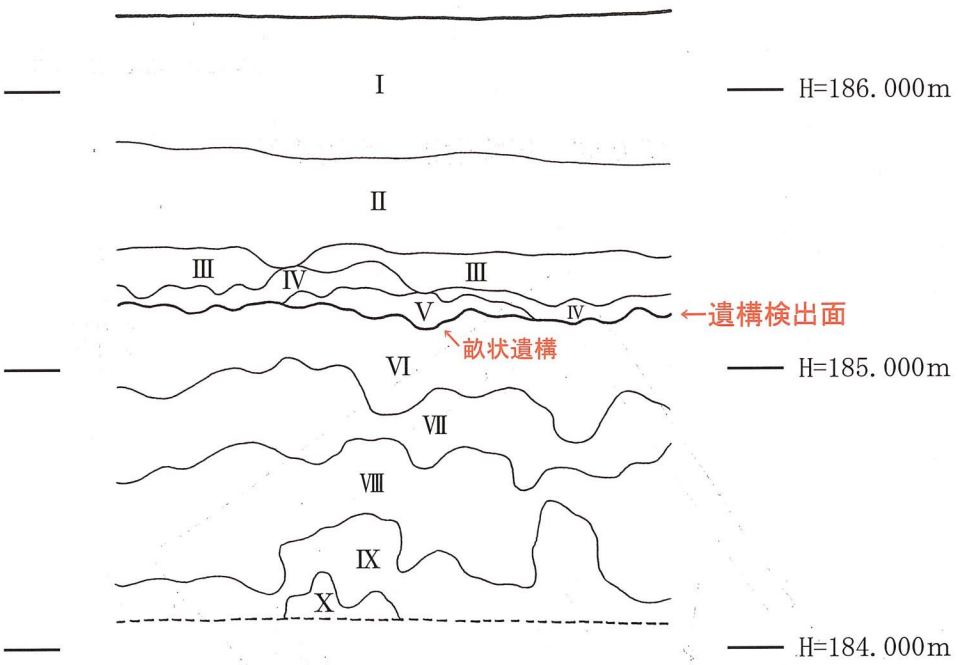



第４図　川除遺跡調査区位置図

９月24日　調査区を設定、重機及びプレハブ等の搬入、表土掘削に入る
９月28日　表土掘削終了
10月１日　作業員投入、全体の精査及び攪乱部分の掘削。畝状遺構検出
10月４日　遺構検出終了、引き続き遺構掘削に入る
10月５日　調査区内地形測量。遺構掘削終了
10月10日　畝状遺構の実測作業に入る
10月13日　調査区内の空中撮影を実施する
10月15日　調査区内出土の遺物取り上げ
10月18日　畝状遺構を除去、下層の掘削を開始
11月６日　出土遺物取り上げ
11月７日　全体を精査後、写真撮影、調査終了

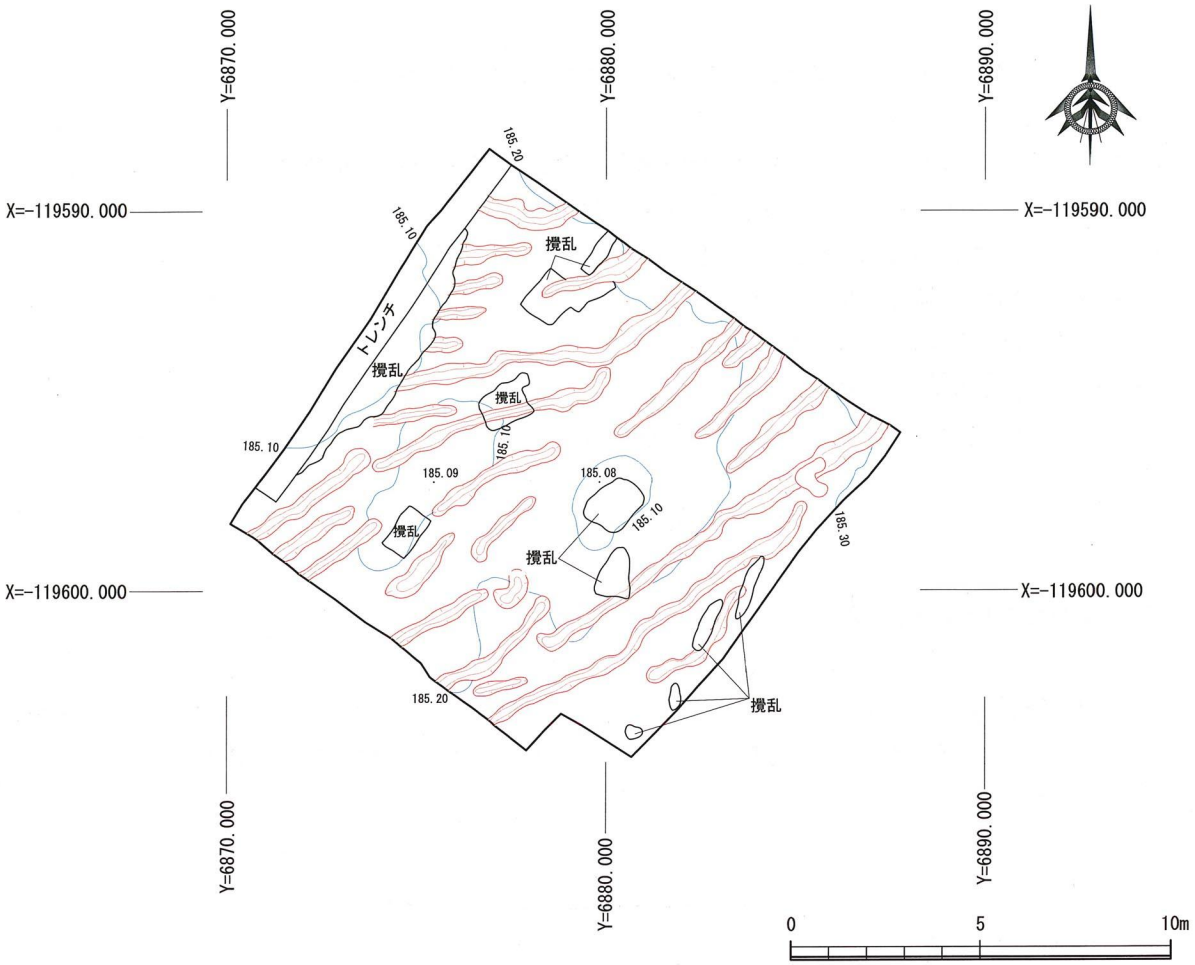
## ２　調査区の層序（第５図）

今回の調査区は、以前は小学校の体育館があったため、至る所にコンクリートによる基礎が打たれていた。又、撤去に伴う攪乱等も含め、層序の状況は決して良い状態とは言えず、

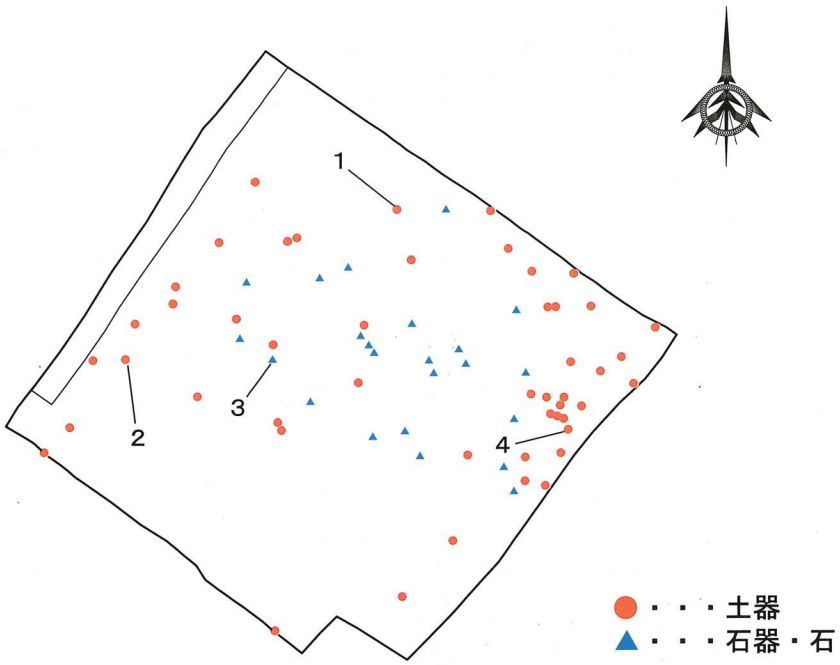



Ⅰ．造成土
Ⅱ．造成土
Ⅲ．Hue10YR 3/1　黒褐色土（粘質少）
Ⅳ．Hue2.5Y 3/3　暗オリーブ褐色粘質土
Ⅴ．Hue2.5Y 4/3　オリーブ褐色粘質土
Ⅵ．Hue7.5YR 6/8　橙色土（粘質少）
Ⅶ．Hue2.5Y 5/3　黄褐色黄ボラ混入土
Ⅷ．Hue2.5Y 4/4　オリーブ褐色硬質砂質土
Ⅸ．Hue2.5Y 4/2　暗灰黄色（ウシノスネ上層ローム）
Ⅹ．Hue2.5Y 6/8　明黄褐色（アカホヤ火山灰）

**第５図　川除遺跡調査区土層断面図**




第６図　川除遺跡出土遺構図




第７図　川除遺跡出土遺物分布図

鍵層となる高原スコリア等も殆ど削平されていた。しかし、遺構出土層になるとほぼ攪乱も終わり、それより下の遺物包含層は良好に残存していた。Ⅰ・Ⅱ層はコンクリートの基礎等旧体育館の残骸や土砂などで整地された層である。よって、純粋な層序はⅢ層からであるが、Ⅲ層はいわゆる「黒ボク」と呼ばれる粘性の少ない無遺物層、Ⅳ・Ⅴ層はⅢ層からⅥ層への漸移層的な層序であると同時にⅤ層で検出した畝状遺構の埋土でもある。Ⅵ層では(厳密にはⅣ・Ⅴ層の下部から)畠の畝状遺構が検出されている。Ⅵ層下部から御池ボラのブロックが混入し始め、Ⅶ層では一部で御池ボラの純層が見られる。Ⅷ層は上層からⅨ層に向けての漸移層で、Ⅸ層は古高千穂峰を噴出源とするウシノスネ上層ロームで、Ⅹ層は鹿児島県南方の鬼界カルデラを噴出源とするアカホヤ火山灰層である。

遺物については、主にⅣ・Ⅴ層の下部付近から見られ、Ⅵ層でピークを迎え、Ⅷ層上部ではかなり少なくなる。Ⅸ・Ⅹ層は無遺物層なので遺物は全く見られなかった。

## 第３節　調査区内出土の遺構・遺物(第６～８図)

今回の発掘調査では、遺構については、Ⅵ層の上面で調査区のほぼ全面に渡って畠の畝状遺構が見られた。遺物については遺構に関連のない状態でⅥ層付近より出土し、Ⅵ層掘削中にピークを迎えた。内容は、細片が多いものの、縄文土器や石鏃・石等が出土した。

### １　出土遺構(第６図)

調査区内全面より、畠の畝状遺構が検出された。東北－西南ラインを主軸とし、幅は最大で52cm、平均的には40cm前後である。深さは低い所では大体6～8cm、深い所で14cmあり、平均的には大体10cm以下である。

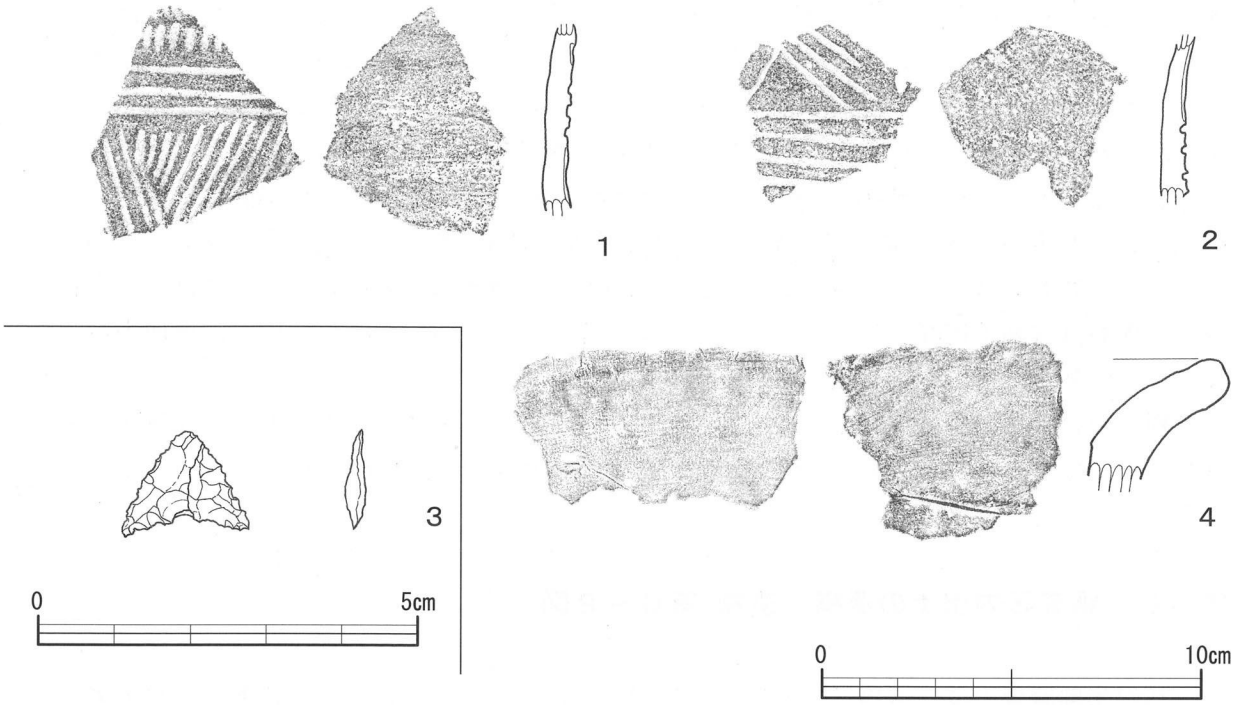
### ２　出土遺物(第７・８図)

遺物については、調査区全面より出土したが、遺構に伴うものは見られず、Ⅵ～Ⅶ層の包含層からの出土のみであった。土器・石器・石など約100点程出土したが、多くは細片で、明確な時期決定に到る材料となるものは見られなかった。以下、主だったものを挙げる。

１～２は曽畑式の断片である。１は不純物の少ない胎土で構成されている。短・長沈線主体の文様で、全体的に彫りが浅く一部不鮮明である。２は、滑石が大量に混入しており、全体的に釉薬のような光沢を帯びている。１と同じ沈線主体の文様だが、幅が狭く、彫りも深く鋭い。沈線の凹部には煤が付着している。３は石鏃である。抉入りの無茎鏃で材質はチャート。４は古代の甕の口縁部断片である。全体的に作りや調整等が粗雑である。

## 第４節　まとめ

今回の調査では、緊急調査であったため、土壌分析等の調査を実施する事ができなかった。




**第８図　川除遺跡出土遺物実測図**

よって、植生状況は栽培植物については不明である。しかし、平成９年度の発掘調査では、微量ではあるが稲作の痕跡が見られたため、今回の調査区もほぼ同じ性格のものではないだろうか。それと、前回調査区の畝状遺構の方向と、今回調査区の畝状遺構の方向が、あまり離れていないのにも関わらず、前回は西北西－東南東・北西－南東ラインであるのに対し、今回は東北－西南ラインと、90度近くの角度のブレが見られる。２箇所とも同じような標高で、調査地点の間もそれほど離れている訳ではない。調査区自体が常に小規模であるため、これ以上は推論になるが、現在校舎のある地下で何らかの変化を受けているか、現在とはかなり異なった地形であったか、いずれも推論の域は出ない。なお、椨粉山遺跡でも同様のブレが見られた。畝の長さにも、ある一定の単位があったのではないだろうか。

次に遺物についてだが、前回の調査では縄文時代前期の轟Ｂ式が出土した。そして今回の調査では、曽畑式が出土した。いずれも古代の畠造成の際の攪乱を受けているものの、縄文時代前期に集落が形成されていた可能性が非常に強い。この２回の調査は、いずれも遺跡の立地する台地の端部を調査しているため、遺物量自体は少ない。現在の校舎付近及び学校敷地内が集落の中心ではないだろうか。又、２点の曽畑式のうち、１は在地化したものと思われるが、２はオリジナルの特徴を保持している。前回の調査でも他地方からの集団流入が指摘されたが、今回もその可能性が非常に高い。

今回出土した土器及び石鏃の考察については、宮崎県埋蔵文化財センターの岩永哲夫氏・菅付和樹氏・柳田宏一氏のご教示を賜りました。この場を借りて感謝申し上げます。

## 表１　川除遺跡出土縄文土器観察表

| 番号 | 出土層位 | 器　種 | 型　式 | 器　色 | | 調　整 | | 胎　土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 表　面 | 裏　面 | 表　面 | 裏　面 | | |
| 1 | Ⅷ層上面 | 縄文 深鉢 | 曽畑式 | 褐　灰<br>Hue10YR 4／1 | 赤　褐<br>Hue5YR 4／6 | ナデ<br>横・斜位沈線<br>縦位刺突文 | ナデ | 径0.5㎜の黄灰色砂粒を少量・径0.2㎜の白色砂粒を多く含む | |
| 2 | Ⅶ層下面 | 縄文 深鉢 | 曽畑式 | 褐　灰<br>Hue7.5YR 4／1 | にぶい褐<br>Hue7.5YR 5／3 | ナデ<br>横・斜位沈線 | ナデ | 径0.5～3㎜の光沢白色砂粒(滑石)を多く含む | |

## 表２　川除遺跡出土石器観察表

| 番号 | 出土層位 | 品種 | 最大長<br>(cm) | 最大幅<br>(cm) | 最大厚<br>(cm) | 重量<br>(g) | 石　材 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3 | Ⅷ層上面 | 石鏃 | 1.40 | 1.70 | 0.25 | 0.80 | チャート | |

## 表３　川除遺跡出土土師器観察表

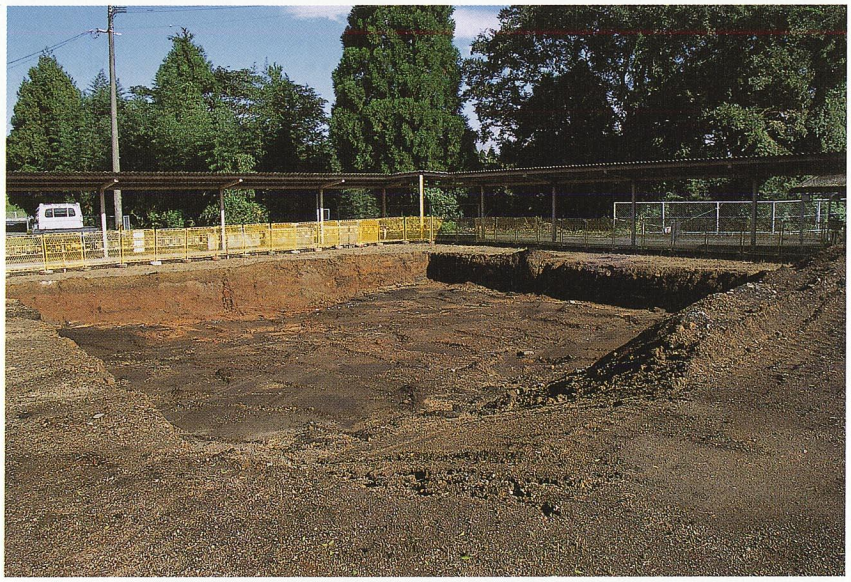
| 番号 | 出土層位 | 種　別 | 器　種<br>部　位 | 器　色 | | 調　整 | | 胎　土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 表　面 | 裏　面 | 表　面 | 裏　面 | | |
| 4 | Ⅴ層 | 土師器 | 甕<br>口縁～頸部 | 橙<br>Hue5YR 6／6 | 橙<br>Hue5YR 6／6 | ヨコナデ | ヨコナデ<br>頸部下ヘラケズリ | 径1㎜の黄灰色砂粒を多く含む | 胎土中に繊維痕？ |

高原町西部より川除遺跡及び霧島連山を望む

川除遺跡畝状遺構完掘状況（真上より）

図版2

川除遺跡表土掘削状況



川除遺跡表土除去状況

川除遺跡畝状遺構検出状況

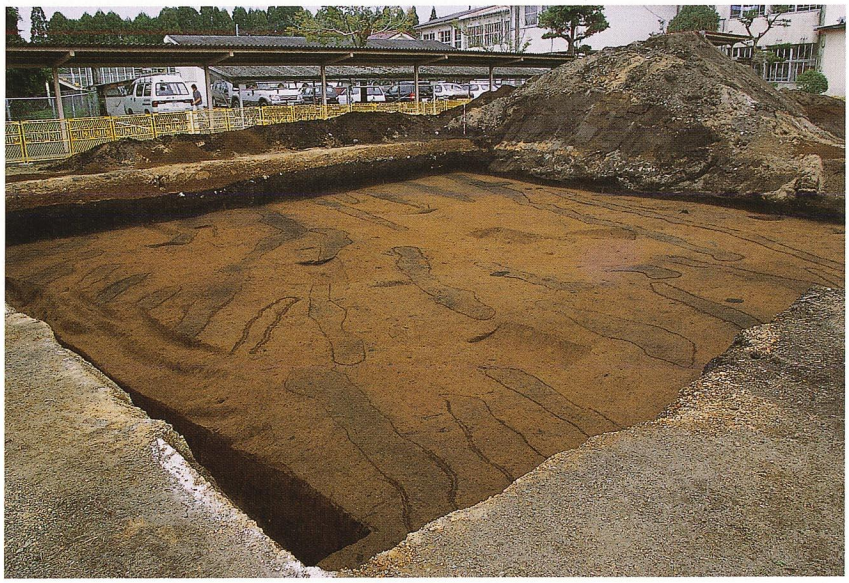
川除遺跡畝状遺構検出状況

川除遺跡畝状遺構検出状況

川除遺跡畝状遺構検出状況

図版4

川除遺跡畝状遺構検出状況



川除遺跡畝状遺構検出状況

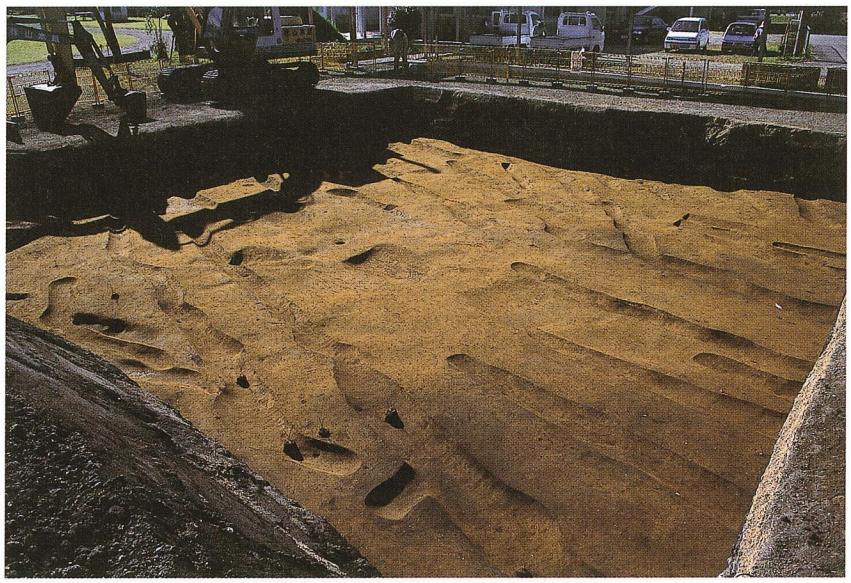
川除遺跡畝状遺構掘削状況

川除遺跡畝状遺構埋土状況

川除遺跡畝状遺構埋土状況

川除遺跡畝状遺構掘削状況

図版6



川除遺跡畝状遺構完掘状況

川除遺跡畝状遺構下層掘削状況

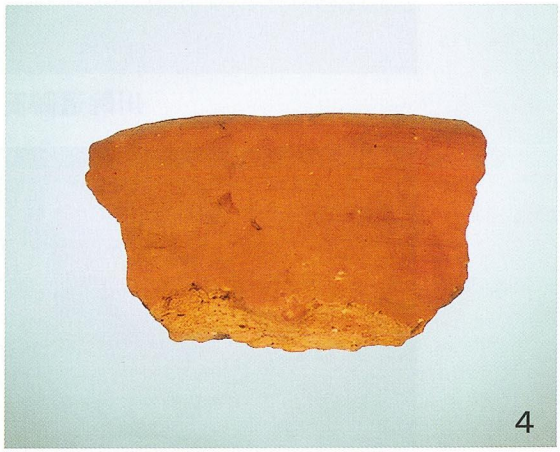
川除遺跡畝状遺構下層遺物出土状況

川除遺跡石鏃出土状況

川除遺跡完掘状況

川除遺跡　層序

図版8



その他の石類（報告書実測図未掲載）

川除遺跡出土土器・石器

# 第Ⅲ章　　藤兵衛山地区の試掘調査

## 第１節　位置及び調査にいたる経緯（第９・10図）

藤兵衛山地区は、高原町大字広原字藤兵衛山に位置する。元々は山地形と思われるが、平成３年頃の圃場整備により西側に下る緩斜面へと地形変更が成された。圃場整備当時は遺跡分布図も作成されておらず、この近辺が遺跡という認識が成されていなかったため、調査の機会なく消滅した。その後、平成８年度から９年度にかけて行われた町内遺跡詳細分布調査事業に伴う現地踏査により表採遺物が確認された。

この藤兵衛山地区に居住する高原町役場職員の黒木惠二郎氏より平成14年８月末に、「畑を耕作中に陥没した」との報告を受けた。現地を確認したところ、陥没箇所に空洞のようなものが見られた。この辺りは「藤兵衛山遺跡」という周知の遺跡であり、殆ど破壊されているため、遺跡の性格が不明であった。陥没の仕方が地下式横穴墓のそれと非常によく似ていたため、遺跡発見の措置を執った。

## 第２節　試掘調査の成果

試掘調査は平成14年９月11日から18日にかけて行われた。地下式横穴墓と想定していたため、まず陥没した内部の土砂を慎重に除去する作業を始めたが、掘削を進めるうち、内部に根腐れしたような樹根を検出した。それが横に並べられたような状態であった事や、近所の「圃場整備後、以前あった茶園がなくなっていた」という話、さらに陥没箇所の壁及び底面に重機の痕跡が見られたため、「圃場整備の際、元々あった茶園の木を埋め、その上から盛り土したが、そのうちに埋めた木が腐り始め、結果的に陥没を引き起こした」という結論に到った。

## 第３節　　まとめ

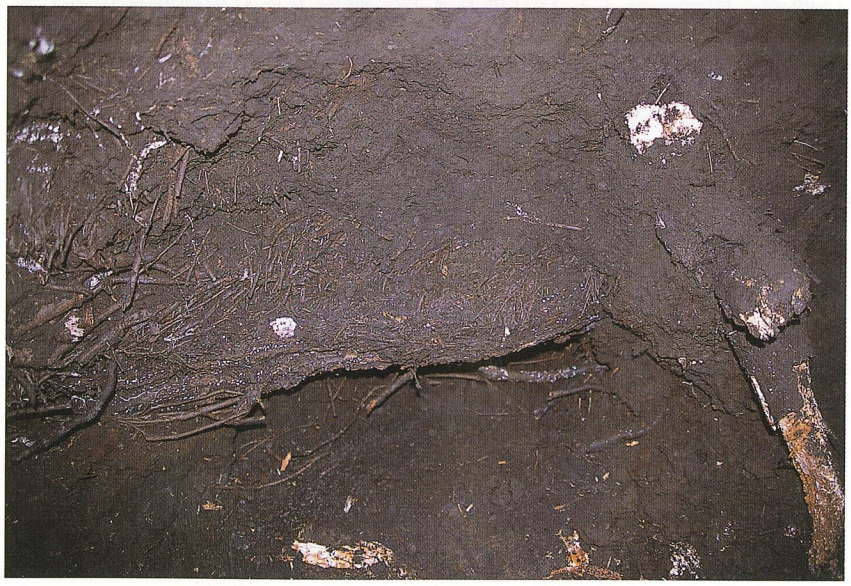
これらの調査では、遺構というものではなかったが、この近辺は、現在でも表採遺物が確認されており、遺跡である事には変わりないため、引き続きの注意が必要である。

第９図　藤兵衛山遺跡周辺地形図

第10図　藤兵衛山地区調査箇所位置図

藤兵衛山遺跡調査区現況

藤兵衛山遺跡崩落部分掘削状況



藤兵衛山遺跡崩落部分内部状況

# 第Ⅳ章　　佐土遺跡の表採資料

## 第１節　遺跡の概要(第11図)

佐土遺跡は、高原町大字広原字佐土に位置する。霧島山系から東に下る細長い尾根上に立地し、尾根をさらに東に下ると前述の藤兵衛山遺跡があり、さらに谷を挟んだ南側には縄文時代後期の土器が多く出土した大谷遺跡がある。

## 第２節　表採資料の検討(第12・13図)

次に掲載している遺物については、平成８年度から９年度にかけて行われた町内遺跡詳細分布調査事業の現地踏査により採集されたが、当地周辺は個人規模の小規模な造成を行う事が多く、耕作中に遺物がよく見られるという話は以前からあった。

当遺跡は、詳細分布調査のみで、発掘調査等は全く行われていない。しかし、表採資料としては膨大な量を保有しているため、資料としてその一部を掲載する事にした。

１～８は、南九州の在地系土器である市来式の流れをくむ一群である。

１～５は、いずれも丸尾式の範疇に入るものと思われる。外形がゆるやかに「く」字形に屈曲、あるいは口縁部のやや下で「く」字状に稜線を作っているものを主体とし、文様はその稜線の上下を中心に、斜・横沈線・貝殻腹縁文を基本としている。１～３は口縁部から貝殻腹縁文を縦２段(あるいは３段)に施文、４・５は稜線の上下に貝殻腹縁文を施文し、その上に端部を円形刺突文で止めた斜・横沈線を施文する。１は俗に言う「金雲母」が大量に混入している。６は市来式である。稜線部の上部にのみ小さく施文されている。７は草野式に含まれるものと推定される。平口縁に縦短沈線を横位に施文し、その下に横位の貝殻復腹縁文を施文している。又、貝殻腹縁文の下にはわずかな稜線が見られる。

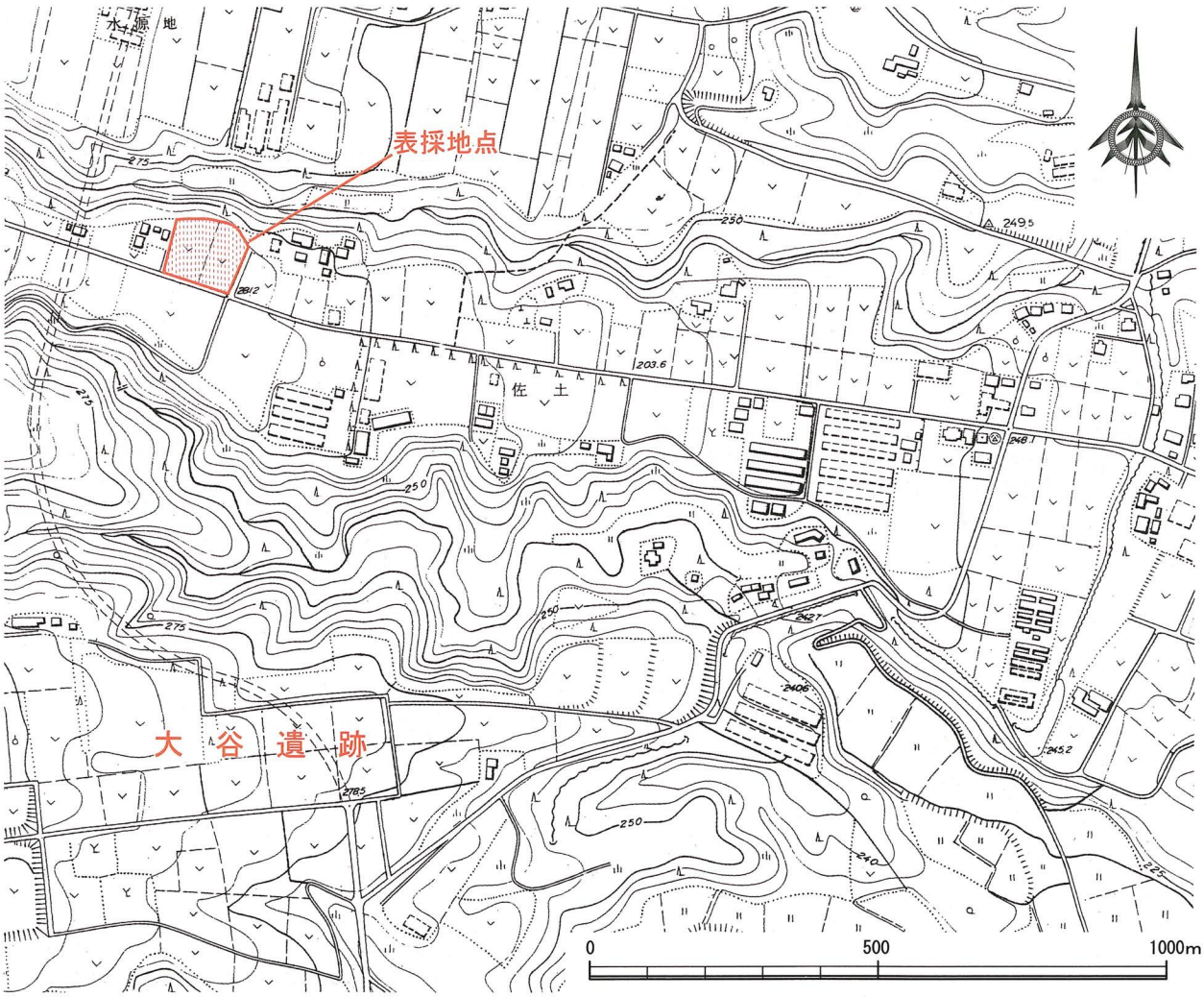
８～15は、非常に分類しにくいが、北久根山式の地域バリエーションの一種と推定される。オリジナルとは器厚・器形・胎土などが異なるが、肥厚させた口縁部に施文したり(８・９)、口唇部は縄文を施文し、口縁部のやや下に刻目突帯を施すもの(10)、口縁部に「M」字状突帯を貼り付けるもの(11)、口唇部に刻目を、その下に幅の広い沈線と円形刺突文を施文したもの(12)など、北久根山式を踏襲しようとする意識は感じられる。又、深鉢だけでなく、脚台付皿も見られる(14・15)。14の皿部断片には、渦文や沈線に区画された貝殻疑似縄文が施文されている。15の脚台断片には、沈線で区画された中に爪形文状の刺突文を施文し、文様の上には円形と思われる透かし穴が見られる。

16～19は、北部九州で発達した「磨消縄文」の土器である。器面全体にヘラによる磨きがかけられているが、縄文施文などについては、沈線外にはみ出したり、縄文充填部分に中途半端に施文されているなど、やや雑な印象を受ける。16は鐘崎式・17～18は西平式と思われる。17は西平式の特徴的である沈線を施文した「く」字方口縁部を有している。19は口縁部及び頸部のくびれ部分に沈線が見られる事から、晩期前半の御領式と思われる。

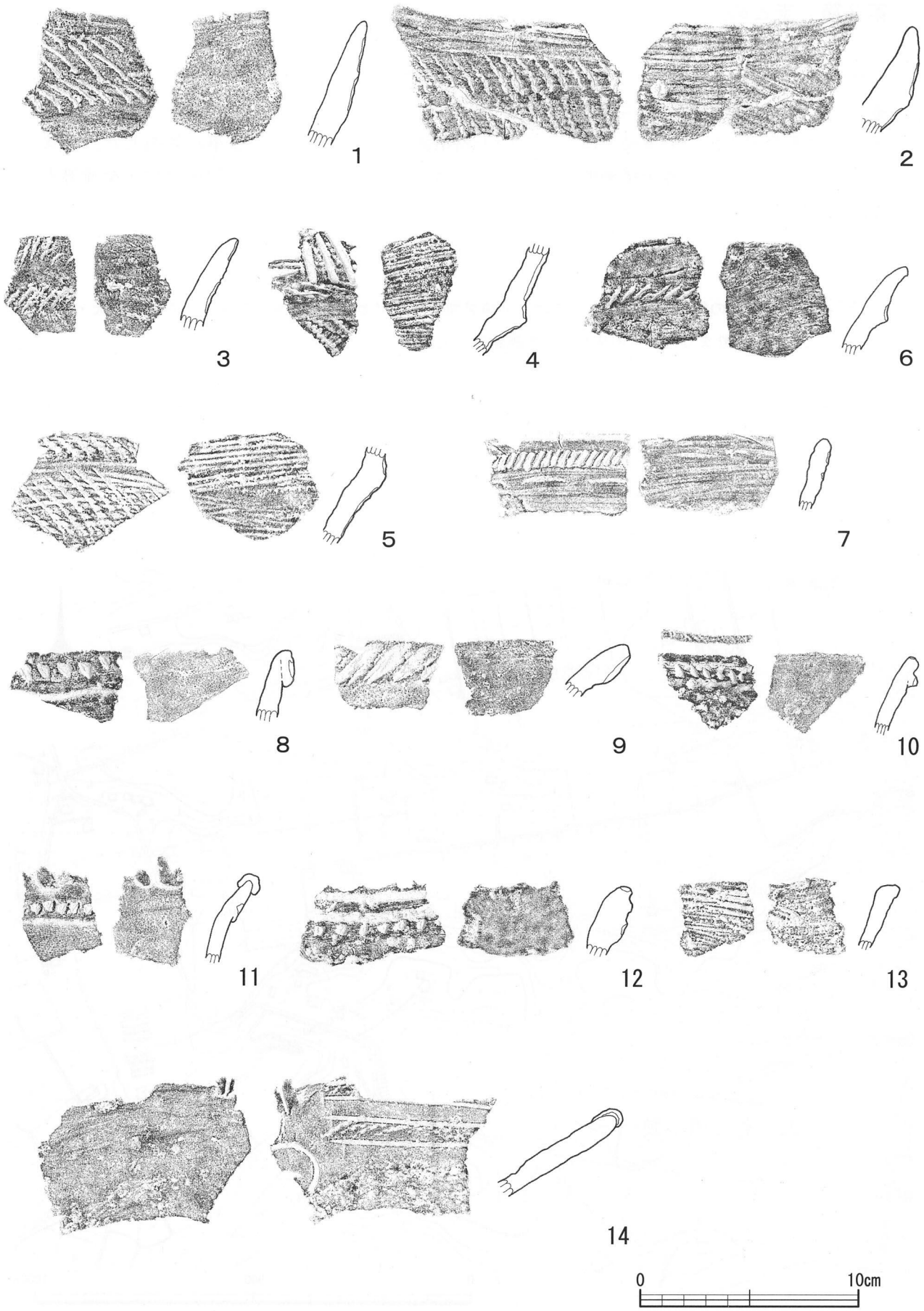
## 第３節　まとめ

今回は、佐土遺跡の中でも、ある一部分の土地から採集された土器をピックアップして掲載したが、これだけでも、南九州在地系土器・中部九州系土器の地域独自変形・北部九州系土器の流入など、決して単純とは言えない土器系統の構成を持っている事が判明した。今後も、こういった表採土器を積極的に取り上げる事によって、縄文土器の地域変化・交流等を考察したい。

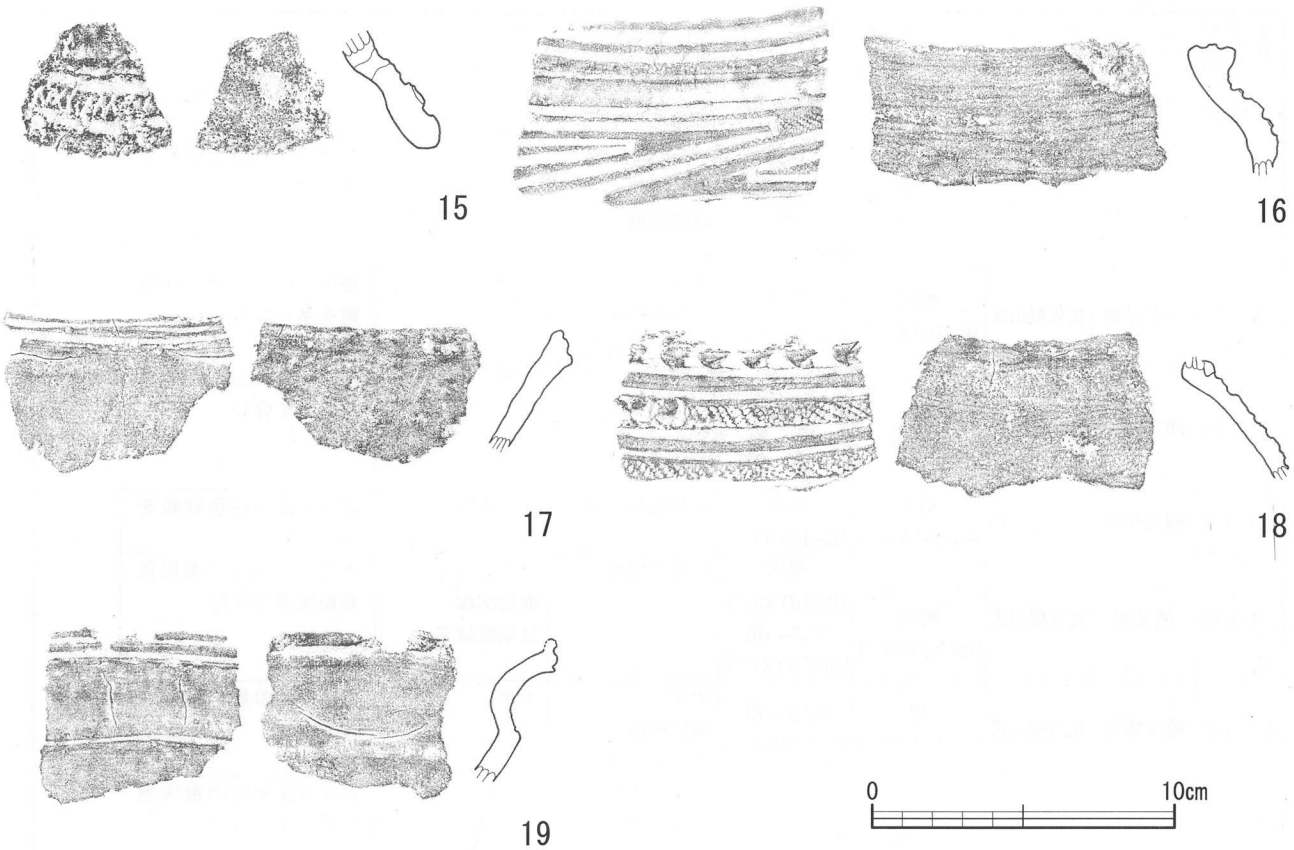
今回掲載した土器の型式分類等については、宮崎県埋蔵文化財センターの岩永哲夫氏・菅付和樹氏・柳田宏一氏のご教示を賜りました。この場を借りて感謝申し上げます。




第11図　佐土遺跡周辺地形図及び表採地点位置図




第12図　佐土遺跡詳表採縄文土器実測図（1）



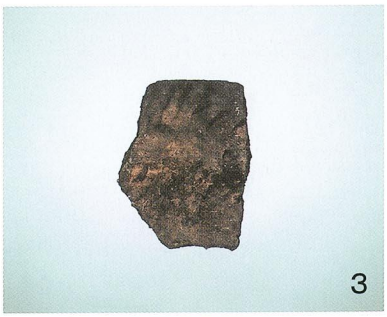

第13図　佐土遺跡詳表採縄文土器実測図（２）

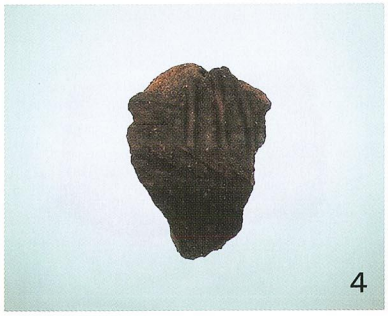
## 表４　佐土遺跡表採縄文土器観察表　１

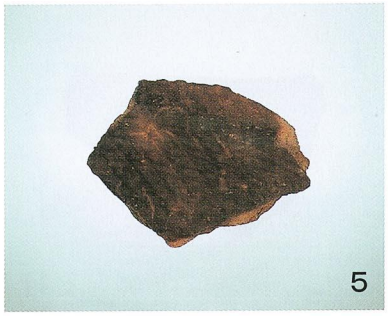
| 番号 | 表採位置 | 器種 | 型式 | 器色 | | 調整 | | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 表面 | 裏面 | 表面 | 裏面 | | |
| 1 | a区 | 縄文深鉢 | 丸尾式 | 褐灰<br>Hue10YR4/1 | にぶい褐<br>Hue7.5YR5/4 | 貝殻条痕ナデ<br>斜位貝殻腹縁文 | ナデ | 径0.5～1㎜の金色鉱物を多く含む | |
| 2 | a区 | 縄文深鉢 | 丸尾式 | 褐灰<br>Hue7.5YR4/1 | 橙<br>Hue5YR6/6 | 貝殻条痕ナデ<br>斜位貝殻腹縁文 | 貝殻条痕ナデ | 径0.5～1㎜の黄灰色砂粒を少量含む | |
| 3 | a区 | 縄文深鉢 | 丸尾式 | 黄灰<br>Hue2.5Y4/1 | 黒褐<br>Hue10YR3/1 | ナデ<br>斜位短沈線 | ナデ | 径0.5㎜の透明鉱物を多く含む | |
| 4 | a区 | 縄文深鉢 | 丸尾式 | 褐灰<br>Hue7.5YR4/1 | 褐<br>Hue7.5YR4/3 | 貝殻条痕ナデ<br>縦・横位沈線<br>貝殻腹縁文 | 貝殻条痕ナデ | 径0.2～1㎜の白色砂粒を多く含む | |
| 5 | a区 | 縄文深鉢 | 丸尾式 | 褐灰<br>Hue7.5YR4/1 | にぶい橙<br>Hue7.5YR6/4 | 貝殻条痕ナデ<br>貝殻腹縁文 | 貝殻条痕ナデ | 径0.5～1㎜の透明砂粒を多く含む | |
| 6 | a区 | 縄文深鉢 | 市来式 | 黒褐<br>Hue7.5YR3/1 | にぶい褐<br>Hue7.5YR5/3 | ナデ<br>短刺突文 | ナデ | 径1㎜の黄灰色砂粒を多く含む | |
| 7 | a区 | 縄文深鉢 | 草野式 | 黒褐<br>Hue10YR3/1 | 褐灰<br>Hue10YR5/1 | 貝殻条痕ナデ<br>斜位短沈線 | 貝殻条痕ナデ | 径0.5～1㎜の白色砂粒を多く含む | |
| 8 | a区 | 縄文深鉢 | 北久根山式 | 黄灰<br>Hue2.5Y4/1 | にぶい褐<br>Hue7.5YR5/4 | ナデ<br>円形刺突文 | ナデ | 径0.2～1㎜の透明砂粒を少量含む | |

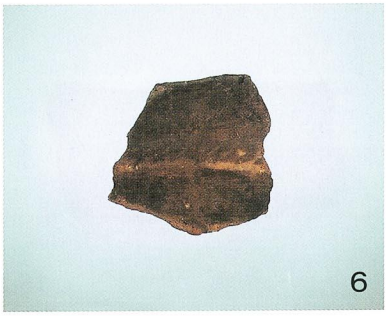
## 表５　佐土遺跡表採縄文土器観察表　２

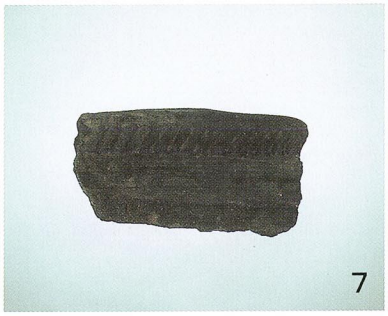
| 番号 | 表採位置 | 器種 | 型式 | 器色 | | 調整 | | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 表面 | 裏面 | 表面 | 裏面 | | |
| 9 | a区 | 縄文深鉢 | 北久根山式 | 褐灰<br>Hue7.5YR4/1 | 明赤褐<br>Hue5YR5/6 | ナデ<br>短刺突文 | ナデ | 径0.5㎜の黄灰色砂粒を多く含む | |
| 10 | a区 | 縄文深鉢 | 北久根山式 | 灰褐<br>Hue7.5YR5/2 | 灰褐<br>Hue7.5YR5/2<br>橙<br>Hue7.5YR6/6 | ナデ<br>刻目突帯<br>口唇部縄文 | ナデ | 径0.1㎜の白色砂粒を多く含む | |
| 11 | a区 | 縄文深鉢 | 北久根山式 | 褐灰<br>Hue10YR4/1 | 褐灰<br>Hue10YR5/1 | ナデ<br>円形刺突文<br>M字貼付突帯 | ナデ | 径0.5～1㎜の乳白色砂粒を多く含む | |
| 12 | a区 | 縄文深鉢 | 北久根山式 | 褐灰<br>Hue7.5YR4/1 | 褐灰<br>Hue7.5YR4/1<br>にぶい橙<br>Hue7.5YR6/4 | ナデ<br>円形刺突文<br>横位沈線<br>口唇部刻目 | ナデ | 径0.1～0.5㎜の白色砂粒を多く含む | 胎土内繊維痕？ |
| 13 | a区 | 縄文深鉢 | 北久根山式 | 褐灰<br>Hue10YR5/1 | 褐灰<br>Hue10YR5/1 | 貝殻条痕ナデ | 貝殻条痕ナデ | 径0.5㎜の白色砂粒を多く含む | |
| 14 | a区 | 縄文皿 | 北久根山式 | 褐灰<br>Hue7.5YR4/1 | 褐灰<br>Hue10YR5/1<br>にぶい橙<br>Hue7.5YR7/4 | ヘラミガキ | ヘラミガキ<br>横位沈線<br>貝殻腹縁文 | 径0.2～0.5㎜の黄灰色砂粒を多く含む | |
| 15 | a区 | 縄文脚台 | 北久根山式 | 橙<br>Hue7.5YR7/6 | にぶい橙<br>Hue7.5YR6/4 | ナデ<br>横位沈線<br>爪形刺突文 | ナデ | 径0.5㎜の黒色砂粒を多く含む | |
| 16 | a区 | 縄文浅鉢 | 鐘崎式 | 褐灰<br>Hue7.5YR4/1 | 褐灰<br>Hue7.5YR5/1 | ヘラミガキ<br>横位沈線<br>磨消縄文 | ヘラミガキ | 径0.5㎜前後の黄灰色砂粒を多く含む | |
| 17 | a区 | 縄文深鉢 | 西平式 | 褐灰<br>Hue10YR4/1 | にぶい橙<br>Hue7.5YR6/4 | ナデ<br>横位沈線 | ナデ | 径1㎜の黒色鉱物を多く含む | |
| 18 | a区 | 縄文深鉢 | 西平式 | 灰白<br>Hue2.5Y7/1<br>黄灰<br>Hue2.5Y4/1 | にぶい黄橙<br>Hue10YR6/3 | ヘラミガキ<br>横位沈線・磨消縄文・刻目突帯・爪形刺突文 | ヘラミガキ | 径1㎜の白色砂粒を多く含む | |
| 19 | a区 | 縄文浅鉢 | 御領式？ | 灰<br>Hue7.5Y6/1<br>暗青灰<br>10BG3/1 | 淡黄<br>Hue2.5Y8/3<br>暗青灰<br>10BG3/1 | ヘラミガキ<br>横位沈線 | ヘラミガキ | 径0.5㎜の黒色砂粒を多く含む | |

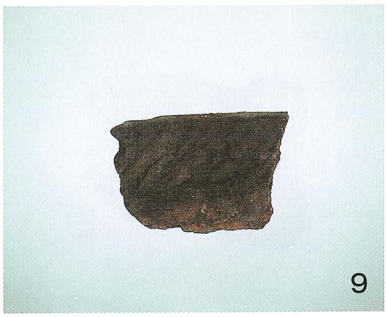


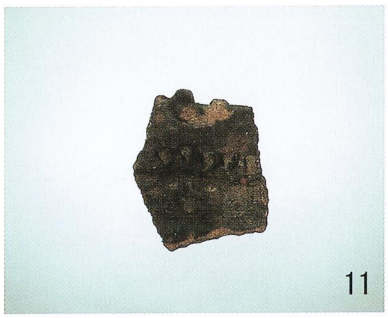







佐土遺跡表採縄文土器（1）

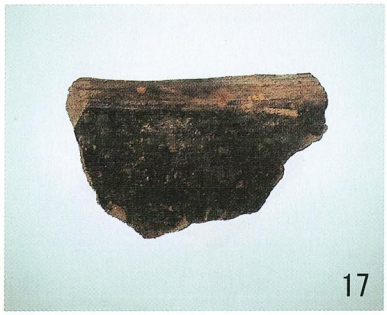
図版11

13

14

15

16


17

18

19

佐土遺跡表採縄文土器（2）

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| フリガナ | チョウナイイセキ |
| 書名 | 町内遺跡Ⅲ |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 高原町文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第１１集 |
| 編集者名 | 大學康宏 |
| 発行機関 | 高原町教育委員会 |
| 所在地 | 〒889-4492　宮崎県西諸県郡高原町大字西麓899番地 |
| 発行年月日 | ２００３．３．３１ |

| フリガナ<br>所収遺跡名 | フリガナ<br>所在地 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|
| ｶﾜﾖｹｲｾｷ<br>川除遺跡 | ｵｵｱｻﾞｳｼﾛｶﾜﾁｱｻﾞｶﾜﾖｹ<br>大字後川内字川除 | 20010924<br>～<br>20011107 | 152 ㎡ | 後川内小学校プール新設工事 |

| 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|
| 生産遺跡<br>散布地 | 縄文時代<br>古代 | 畝状遺構 | 縄文土器（曽畑式）<br>石鏃<br>土師器 | 当地区で縄文時代前期遺跡が確認された。 |

| フリガナ<br>所収遺跡名 | フリガナ<br>所在地 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|
| ｻﾄﾞｲｾｷ<br>佐土遺跡 | ｵｵｱｻﾞﾋﾛﾜﾗｱｻﾞｻﾄﾞ<br>大字広原字佐土 | | | 平成８～９年度町内遺跡詳細分布調査事業 |

| 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|
| 散布地 | 縄文時代 | | 縄文土器<br>（後～晩期） | 縄文時代後期から晩期にかけての複数の型式が見られた。 |

高原町文化財調査報告書　第11集
町　内　遺　跡　Ⅲ

２００３年３月

編集・発行　宮崎県高原町教育委員会
〒889－4492　宮崎県西諸県郡高原町大字西麓899
TEL　0984－42－2111
印　刷　(株) 長 崎 印 刷
西諸県郡高原町大字後川内18-2